※R18G+【漂流宇宙亀情事】サンプル

意馬心猿

一人目メインヒロイン:凛子(りんこ)♀
両親は早くに先立たれ遺産を奪った身内の元で虐げられ友達もいない子。唯一、好きな宇宙への憧れを果たす為、遺産を許可なく引き出し修学旅行へ来たがレイプ未遂され絶望の中、宇宙事故で救命ポッドに乗って脱出。その間、サポートＡＩのニシと友になり落ちた惑星でカメの保護を受ける。

一人目メインヒーロー:カメ♂
母星を管理する研究者達のクローン。管理者。孤独から徐々に精神が崩れ欠けている最中、凛子達が落ちてきて執着していくがピュアデレ。

サブキャラ:ニシ(サポートAI)
凛子によって自我が芽生えたＡＩ。カメの提案により新たなクローンの中へ入

る事になる。

二人目サブヒロイン:カシア♀
ヨシアの父親違いの姉。弟の為に生きている感がある。弟を溺愛している。

二人目サブヒーロー:ヨシア♂
カシアの父親違いの弟。クズ父に虐待され幼い頃に肌の病気になり姉に過保護気味に育てられ姉を愛している。

モブ1:事故前に凛子をレイプしようとした学生達〜

モブ2:ポチャ。陰キャの元、イジメられっこ

モブ3:タケルと二人の彼女。陽キャの元、イジメっ子

モブ4:シェフ。礼儀正しい子が好ましい、お爺さん

モブ5:謎の少年

モブ5:船員や死刑囚の男達やクローンなど

★カニバ要素やG+あり(ガッツリ食べる)

★生理ネタあり

★モブ姦あり

★ピュアデレ、一部、微ヤンデレ

★近親相姦(父親違いの姉弟)

★放尿(飲む)
★睡眠姦
★触手要素あり
★バトル(ガチ目)
★なんちゃってＳＦ映画風味
★純愛
★イチャラブ
★妊娠
★ハート喘ぎ

今回は素直に思いっきり創作したいものを出しました。なんちゃってＳＦ映画風味。遭難にあたってカニバありバトルあり。結果的に名前ありなどはハッピーエンドです。

漂流宇宙亀情事　前編

宇宙のデブリが弾丸の如くぶつかって船は呆気なく腹に穴を空けた。フシュフシュと溢れる息は、まるで酸素を求める泳ぎが下手な魚で暗い暗い海を馬鹿みたいに踊り狂う。必死に駆け込んだポッドの中で彼等は祈りを見せたが運の無いままに子供達は先の見えない排水口に飲まれてしまったのだ……――

＊＊＊

カチカチ、カチカチ。

何かの機械音。酷い頭痛、目眩、吐き気をその音は刺激する。汗でへばりついた髪の間から彼女は瞼を緩く動かした。しかし開きたくとも寝ている途中のような重さが上手くいかない。どうやら金縛りだと思い呼吸だけが、フッフッと緊張感を持って身の内に響いた。

金縛りは嫌いだと凛子は思う。小さな頃から独りで寝るのが嫌で仕方がなかった。独りとは無情だ。独りは寂しい。救いを求めたくとも震えようとも助からない不安だけが重くのしかかってくる。

そんな時、見透かしたように浮かぶのだ。

頭の中に誰か知らない知りたくない何かが。暗い暗い中で浮かぶモノは何なのか何なのか人の形のようで違うそれに震え上がり逃げたい一心で身体をもがくが全くもって言うことを聞いてくれない身は、その何かに何時も負けてしまう。

ギシッ。ミシッ。

汗、熱い、息、苦しい。息が上がり迫り上がる涙が歯の震えを増長させる。

カチカチ。ギシッ。ギシリ。

凛子はハッとした。音が。暗闇以外から音がしている。ヒューヒューっと凛子の喉は声を出せず擦れた息を出し生物的な臭いが自身を包み込んだ。

バキキキッ！

酷い音だ。凛子は骨が粉々にされたのだと思った。そんな既視感を感じる程に大きく全身に響く音に凛子は堪らず嘔吐した。口から鼻から目から下からも

液体を垂れ流したからだろうか。

凛子は漸く瞼が上へ動くのを感じた。ぶるぶる、ぶるぶると震えながら暗闇ではない明るい空間が入り込む。白い。急な光は凛子に何も見せず眩しい痛みが眼孔を刺激した。

その痛みに凛子は酸っぱい口から、ホッと息を吐いた。

生きている痛みだ。

「生きてる……？」

何時も得体の知れない恐怖は命を抉ってくる。しかし今日は不思議な事に凛子を心配しているような声色が聞こえた。凛子は何度か開閉を繰り返した目を恐る恐る眩しい方へと向けた。

チカチカ。チカチカ。

何か丸いシルエットが見える。酷く明るい光に照らされたシルエット。何だろうか。

「生きている……っ！」

それは切羽詰まったような、しかし歓喜に満ちたような声色で骨を軋ます音を立てながら凛子に近付いてくる。

バキッ。ガシャン。ガチチチッ。バキンッ。

酷い音でも、シルエットが視界に入ってから凛子の震えは止まっていた。どうも、善といったものをシルエットから感じるからだろう。

「どっか痛い？　何か飲む？　ここから動かしても大丈夫そう？　どこか圧迫はされて……ないね！　あ～！　すぐ出そう」

ポンポンと喋る声を聞きながら、はっきりとしていくシルエット。凛子は漸

く目に見えた、その姿に瞼を、また繰り返しぱちぱちとさせた。
眼前には亀がいた。否。大きな亀の甲羅を背負った男がいた。
「奇跡だ」
亀は凛子をベットのような所に寝かせて傷の手当てをしている。
「救命ポッドが何台も落ちてはきてたけど生命反応があったのは君のポッドだけなんだよ」
凛子は、その言葉に何かを思い出そうと、きょろりと目を動かす。
「多分、順番と角度も幸いしたんだろうね何台前かは完全に溶けているし」
「団子の状態で君の前のポッドがクッションになって……でも後ろのポッドは酷いものでね。ああ……君のポッドも正直、生命反応が出た時は驚いたんだけどさ」
うんうんっと頷く亀に凛子は漸く自分達の修学旅行の船がデブリで操縦が効かなくなり宇宙空間の渦に飲み込まれたのを思いだしたのだった。

「……に」
「水かな？」
亀は凛子の背を腕で支えながら持ち上げると水の入ったお椀を傾けた。凛子の口端から液体がこぼれ落ちる。舌に触れた水は酷く甘く感じた。
「ああ……上手く飲めないんだね……点滴はするとしても……」
亀が少し困った表情をする。
「……に、ニシ……は……」
凛子は一つ一つ声を出していく。
「……君が休んでいる間に、もう一度探してみよう」
そう亀の彼は優しく呟いて凛子の頬を撫でると水が入った、お椀を口にあおり彼女の唇を塞ぎ液体を、注ぎ込んだ。凛子は目を白黒させて困惑を見せたが抵抗する気力は無く、それよりも、ゆっくりと入り込んでくる甘い水が美味しくて、ごくごくと喉を鳴らしたのだった。

＊＊＊

修学旅行の許可は勝手に埃をかぶった親戚の通信機から出した。学園が好きかと言われたら特には好きでは無い。だが修学旅行先で見れるであろう宇宙の美しさを人生で一度ぐらい経験してみたい。そう思ったのだ。学園を卒業すれば親戚は私を家から追い出す。死んだ両親の遺産は彼らが持ったまま。学園の高い修学旅行代を出したがらないであろう事は予想出来たが、そこも遺産ＩＤから勝手に支払うように弄っておいた。帰ってきた時にはバレて、また殴られるだろうが私は今を楽しみたい。約、十日間の宇宙旅行。これが終わった後なら死んだってかまやしない。

「なあ凛子」

「……？」

椅子に座り窓から宇宙を眺めていれば、よく知らない男子生徒に名前で話しかけられた。学園は単位制であり必須科目を除けば比較的自由に授業は選べる。そして交流関係は、そこに順次し目の前の彼らとは特に交流は無かったと思われた。

「一人なの」

「今日も付けなきゃだろぉ？」

「ほんとの事、言っちゃ可哀想じゃんか～」

「ぷはっ」

小さな笑い声が目の前の男子生徒達から流れ嫌な雰囲気を感じる。私は椅子から立ち上がり、その場を去ろうとしたが初めに声をかけてきた男子生徒が前を塞いだ。

「ちょっとー駄目だろー話、途中で席を立つとか礼儀がなってないねえ」

「まあ親無しだし仕方ないんじゃね？」
「つーか。お前、旅行来れる金あったのな」
「あー……それ。オレも思ったー」
「凛子さあ……」
「気安く名前を呼ばないで」
「……あ？」
先程から苗字ならまだしも下の名前を逐一呼んできて、その度に背中に悪寒が走った。やめてほしい。気分が悪くなる。折角、宇宙の景色を楽しんで気分が良かったというのに最悪だ。
「え？　生意気じゃね？」
「まあ身体売るような女だしな碌な教育受けてねえんだろう」
「あ～なるほど」
「ぶっ」

また笑い声。それにしても急に何なのだ。いちゃもんの付け方が悪質すぎる。
「頭おかしいんじゃないの」
「おわ強気」
「頭がおかしいのは、お前～」
「学力も大した事ないしな」
「確か下から数えた方が早かったよなー？」
まともな資料データーを買う資金を一銭も貰ってない為、学園の紙の書庫が存在する図書館で勉強をしていたが資料探しに時間がかかり過ぎる為、結果的に私の学力は低いものとなっている。取られた親の遺産から資金調達をしたのは今回が初めてだ。もしも前もってやっていたら今回の宇宙旅行には来る事が叶わなかっただろう。
「はあ……貴方達が、そんなに私に興味があっても私は興味がないけどね」
「「……」」

男子生徒達は嫌そうな顔や真顔になって私を見る。内心、恐怖があったが不愉快さでの怒りの方が気持ちが勝っていた。
「あぁ！　めんどくせっ」
「きゃっ」
「うわ、可愛い声出すじゃん」
「な、なに……っ、んぐっ」
「わざわざーこんな人気の無い所で、男待ちしてんだから好きだよなあ」
「やめっ、ぐっ」
数人に床面に押し倒され下のカーペットに身が沈む。
「お前、見た目は最高なんだよな」
「どうせ股開いて金稼いだんだろ？　良いじゃねえか暇つぶしにさあ」
「気持ちい事して仲良くなろうよ～」
「って、うわ、こいつ……」

「あ～女の日か」
「へ～変なニオイすんのなあ……」
「げー汚れるじゃねえか」
　私を押さえつけている彼らは宇宙用のスーツを無理やり開けて中を見て、それぞれが勝手な言葉を吐き出した。私は、もがいたが力では敵わず声を出したくとも口元を押さえられた上に恐怖から上手く喉が動かない。音にしようともカスカスと空気が漏れるのだ。
「どうする？　って……お前、まじか」
「ひ、ぅぐ……」
　股の間に生温かな刺激を感じ震えた。
「ん……いやさ～彼女の舐めたいって、この前言ったら断られたんだよね～」
「はあ？　気持ち悪りい奴だな……」
「……まあ匂いは結構、なんか美味そうな感じだよな」

「そう、なんか、そうなんだよね」
「いやいや……」
「うわ、すげー舐めるじゃん……」
完全に宇宙用のスーツは脱がされ脚を開かされた中に顔を突っ込んだ一人は私の股の間を、べちゃべちゃと音を鳴らし舐めていた。
「おっぱいデカいよなあ。おわ、やわらけ……」
「え、アイツのと全然違う……どうなってんのこれ」
無遠慮に左右の男子生徒が私の胸を掴み揉み痛い。けれども股の間を舐める舌使いは嫌なのに初めて感じる甘い刺激で腰が浮いていく。
「お、感じてんじゃん♡」
「ん……♡　これで合意だね♡」
私の股の間を舐めながら生徒は指を一本入れていき動きを止めた。
「あれ、これ処女だわ」

「は？　まじ？　身体売らずして、こいつが、どうやって乗るわけ」
その言葉に動揺したのか男子生徒の口を塞いでいた手の力が緩む。
「……死んだ両親の遺産でよ！　もう、ほっといてよ！　私だって宇宙をんっ、ぁ、な、と、とめ」
指を一本入れたまま、生徒は舌の動きを止めず刺激し続け私は一人で、こっそりとストレス発散でしていた時とは違う感覚を味わい身が跳ねた。
「う、ぅ……ぁっ」
視界がチカチカする。何が起こったと言うのか。
「血の味だった？」
「血だけど……なんつーか悪く無い感じ？」
「うえー僕も舐めてみようかな」
「ほい」
「お前らなあ……まあ良いや、俺は綺麗な時に入れるから今回は舐めろ、ほら」

顔横に宇宙用のスーツの排泄用の場所を開けて立ち上がった男性器を出した男子生徒を睨む。
「それとも中に出された方が良いか？　ん？」
「生理中ってさ妊娠しないんだっけ？」
「さあ？　まあ薬あるし大丈夫なんじゃね？」
「ほらほら～素直になれば、それぐらい買ってあげるからさ～♡」
私の、お腹を撫でながら先程まで股の間を舐めていた生徒が笑って言い。
「っ……う、ぐ」
もう片方の生徒は反対に股の間に顔を入れて穴の中へと舌を入れ込んだ。また新しい液体の粘着質な音を聴きながら私は涙を流し震える口を開けて少し尿の臭いがする男性器を口へと含んだのだった。

＊＊＊

「良いの？　処女、オレがもらって……お前、凛子狙って……」
「はぁ？　うっせっ、べ、別に何回めだろうが同じだろ。血とかクソ汚ねえし！　つーか、そーいう事、言うなよな、マジで！」
「あはは」
「いーんじゃね？　一番のヤリチンは処女慣れしてんでしょ」
「え～快楽堕ちしちゃう感じ？　ウケる」
「いやー流石に生理中の処女に入れるとか初めてだわ。初体験♡」
宇宙用のスーツの排泄時に開ける部分を開き私の股を先程、舐めた生徒は腰を近づけていく。
「……っ」
その時、時間が妙に、ゆっくりと感じた。舐めるような視線、荒い息づかい。

生温い汗が垂れ落ち体臭が鼻腔に入り込み。ひたりと触れた固いモノが私の大事な部分を滑り防備が効かない、そこへと捻じ込まれていく。

――……終わり……もう終わりなのね……

死ぬ前に人生で一度ぐらい好きな瞬間を思いっきり見飽きる程見つめ、そして死にたかった。なのに、こんな風に身勝手な押し付けで最後の希望は奪われてしまうというのか。

――……ぁあ、ぁあ……なに、それ……腹が立つ……腹が立つ……！

腹が立ってしょうがなかった。勝手な憶測と欲の発散を楽しむ彼らや、それらをどうにかする力が無い自分に酷く、酷く腹が立ち恨んだ。

――……こんな奴ら……皆、皆、アイツらもコイツらも人の希望を平気で奪う奴らなんて消えてしまえば良いのに……!!

そう怒りで頭がの中いっぱいに自分の叫びが響き渡った時だ。身が浮かんだ。私だけではなく、その場に居た全員の身が浮かんだのだ。

ズドオオオオン……

何か物語で表現されるような大砲が船を攻撃した音。そんな風に感じた。興奮で色めき立っていた彼らと共にカーペットに落ち。彼らは困惑した表情で辺りを見渡した。すぐに天井付近で非常時に流れる立体ディスプレイが映し出されデブリの事故下にあるという情報が流れた。私も天井側に視線を向けると困

惑しながらも身体の生理現象が止められなかった一人が目を見開き私の口内から抜け出ていた男性器から白い液体を溢し固まっていた。
「え、まじ？　今、行く。何番のに乗る？　それにオレも乗るし」
先程、私の中にモノを入れようとしていた男子生徒は耳の装飾型になっている通信機で誰かと話しながら身を手早く整え動き出す。それを見て他の面々も我先にへと立ち上がった。
「なに？　まじで緊急なわけ」
「とりあえず全員、救命ポッドに乗れってさ」
「たくっ、これからって時に……」
「つーか出してんじゃん」
「うるせっ」
面々は軽口を叩きながら身を直し私にしていた事柄など、どうでもよくなった雰囲気で、その場を去っていく。私は繰り返される緊急放送の中、裸体でカー

ペットに寝転がっており、ぼんやりと天井を眺め軽い笑い声が喉から零れたのだった。

「……あは」

＊＊＊

服を着直し口をゆすいで顔を洗い救命ポッドへと、のんびり向かった。正直な所、大した事が無いんじゃないかという考えと先程の彼らが苦しめば気分が良いのではないかという高揚感で現実味が無く歩いていた。塞がっている救命ポッドの隣を歩いていく。

「何をしてるの！　早く乗りなさい！」

ウロウロとしていた私に気付いたらしい確認作業をしていた船の船員の一人

が、そう言って近づいて腕を掴み鬼の形相で開いているであろうポッドを探す。
「ここ、もう一人入れられますね？　開けて協力を、お願いします！」
『うるせー！』
『早く、どうにかしろよな！』
映像に移された中には最悪な事に先程の男子生徒と他、女子生徒の姿が見えた。私は後ずさり顔を左右に振る。
『おあ？　凛子じゃん』
『うわ、忘れてた』
『え？　乗せる？』
「何、君ら知り合い？　それなら丁度……」
私は船員の掴んでいた手を振り払うとニヤニヤしている画面から顔を反らし走り逃げる。
「ちょっと君！」

滑稽だ。命に比べたら大した事など無い。そう誰かは思うかもしれない。しかし私には、どうしたって、あの空間に乗るなど耐えられなかった。自分を殺すなら死に場所ぐらい選びたい。

「ちょっと！　いい加減にして！　今、緊急事態なのよ！」

荒い息の船員に追いつかれ、よく知らない非常口と書かれた場所の下で息絶え絶えに私は膝を付き項垂れた。

「さあ、戻るわよ」

腕を掴まれ立ち上がるように促され私は顔を左右に振りながら呟く。

「さ、さっきの……」

「私達には貴方達の人命を守らなきゃいけない義務があるの、だから」

「ひ、人達に……」

ハッキリと喋ったつもりが震えて呂律が上手く回らなかった。

「え？　何？　あ、すみません今、最後と思われる女子生徒を入れますので……」

「……レイプされ、て」
通信機に言葉をかけていた船員の動きが、ぴたりと止まり、じろっとした瞳が向く。
「それ本気？」
本気とは、どういう意味だろうかと俯いていた顔を上げ表情を見れば船員は怒っている様子だった。
「ただ人を困らせたくてやってる訳じゃなくて？　貴女、ありがちって感じだし」
「……え」
責める口調に愕然とする。
「な、なんで」
はあっと船員は溜息を吐き鬱陶しそうに呟く。
「最近、多いのよね。重そうな事ばっか言って悲観的に見せて酔う子。やんなっ

ちゃう」
「……なに、それ」
「あのねえ。人数制限の確認で、あのポッドが開いていたのは偶然だし、そんなピンポイントでレイプした相手が乗ってる？　バカバカしい……例え、そうだとしても死ぬかもしれない瀬戸際なのよ？　貴女が、こうして迷惑をかけている間に私達船員の避難時間も危うくなるの、わかる？　私達の命を今、犠牲にしてるの！　ほんと迷惑……モノは考えて言ってちょうだい……まったく……」
「……す、すみません、でも」
「でもじゃない！　私達を殺す気なの貴女は！」
「……っ、迷惑をかけているのは申し訳ないと思います、私も軽率だと、ただ他、せめて他のポッドを……彼らの所だけは……っ」
「はあ？　まだ言うか！」
再度、怒鳴られた瞬間、緊急ブザーが辺りにけたたましく鳴り響いた。

「はい、すみません。すぐに……はい……はい……」
通信機に向かい汗を滲ませながら船員は喋り私の腕を離す。
「もう、私は行かなきゃいけないから、さっきの救命ポッドの番号は〇〇〇〇〇〇番、このまま真っ直ぐ行けば行けるから、ちゃんと友達に謝って乗せてもらいなさい」
「……」
そう言うと船員の彼女は忙しそうに走り去って行ってしまった。私は並ぶ救命ポッドを眺め、ぼんやりと歩いて行く。
――……友達に謝る？　なんで、そう思うの……？　私、嘘なんて……
死にたくないが、アレに乗るぐらいなら死んでしまいたい。そんな気持ちで言われた反対側のポッドへと進み行き止まりへと差し迫った。奥まで行くと小

さなポッドがあり試供品と書かれた札が付けられていた。どうやら三人乗りのポッドで高級層のファミリー向けに売り出されている品らしい。外への搬入口の所へ乗ってはいるがカバーや蓋がしてあり、そういった用途には使えない雰囲気を感じる。

「……」

それを見つめていれば船で大きな爆発音が響き。私は身を崩して試供品ポッドにぶつかった。その拍子だろう蓋が開いていた椅子に自然に腰が座り慌てて出ようとする前に安全ベルトが私の身体を保護し定位置に留められた。

「あ、う、動いてる……？」

爆発で誤作動を起こしたのだろうか。

『緊急事態発生、緊急事態発生』

爆発音と、ブザーに混ざり音声が耳が痛い程、各所から聴こえる。

「……これは」

私はポッドの留め具になっているロープを外そうと一度、外に出ようとしたがベルトが外れず動けない。手が伸ばせる範囲の蓋を手あたり次第開けると非常時のサバイバル用品が出てきたので、その中の刃物の頑丈な透明な保護フィルムを噛み千切り内側の高そうな皮の鞘部分を外しロープを刃先で擦り少しずつ切っていく。頑丈なロープは中々切れず苦戦したがポッドが動き出した事により引っ張られ私の付けた傷の部分から、ピチピチ音を立て外れていく。

「くっ！」

ブチっと音がして私が握りしめていない外の方のロープ側がゴムや鞭のしなり、荒ぶる蛇の如く流れ近くに合った物累々を弾き飛ばし看板を真っ二つにして動きを止めた。

「う、うわぁ……」

一歩間違えれば自分が、あの看板になっていたのかもしれない。

「はは……わ、私って……本当、軽率なんだわ……」

怒られた言葉を思い出すと頭を熱くさせ嫌な気分になるが確かに考え無しと実感した。しかし今の事柄で蓋下の安全装置を内側にずらし閉めのボタンを押すと何かカバーに引っかかりながらも蓋は閉まり内側で光るディスプレイにも確りと密閉されたと表示された。

「そう……」

もし、これで何事もなく終わったとして勝手に試供品を荒らしたのだ、それ相応の賠償金の問題になる可能性がある。

「……あの人達は出したくないでしょうけど法的に出来るなら遺産全部で払ったって良いわ」

そんな事を呟きながら刃物を元の鞄に入れ直し隣の椅子の蓋を開け鞄を入れる。椅子の中には毛布が入っており私は、上からそれを被り画面を見つめ確認する。すぐ近くには試供品ならではの操作説明書があり思った以上には使い易そうな救命ポッドなのだと思った。

「手動かあ……いっそ、このまま一人旅に行って宇宙の中で終えるのも良いかも……」

そんな事を考えていれば身に違和感を感じハッとする。先程の緩やかな動きとは違う。どうやら本当に船から宇宙空間へと投げ出されたらしい。窓用のフィルターを上げると暗く闇が広がる宇宙空間に幾つものポッドが浮いているのが見え、それぞれが何やら動き出している。

『稼働範囲の着陸可能の連盟星は三種類あります。どちらを選ばれますか』

「へ！　あ……ＡＩ……え、あー……アナタのおススメは？」

『最善は宇宙連盟加入惑星、ゴルダファムア星が良いかと思われます。そちらの地域は保証も比較的良く観光地もございますので、おススメとなります』

「そ、そうなんだ……じゃあ、そこで……」

『承りました』

そうＡＩが言った瞬間、私のポッドは動きが急速した。えっと思えば先程ま

で居た大型の船が爆発し光り、そしてその爆風で私達の細々としたポッドは勢いよく吹き飛ばされている。
「わ……ぁ……綺麗……」
宇宙空間で爆発した船は終わりを迎える星のようで私は、ぼんやりとその姿が見えなくなるまで見つめたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊間＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「人の月経の仕組みは、こちらの過去の周期より六倍速いね」
「みたいですね……」
『リン断る事も可能だ』
「でも、その場合、クローンが欲しいと思う」

「クローン……」
『この星は女性個体の数が減少し滅びかけている』
「もう滅んでいると変わらないと思うけどね……」
カメが軽く口端を上げて、そう呟いた瞳は、どこか物憂げな印象で凛子は瞳を、キョロリと動かした。今、凛子達が居るのは巨大な泉の縁で彼女は初めて見る視線での透き通った水に感嘆しつつ考える。この星の現状は美しく見えるがカメは過去の研究者のクローンであり今は管理者として過ごしている年月を考え物悲しく感じた。カメが同情を計算に入れていたわけでは無いが結果的に、それは凛子の意思を固める事となった。
「その月々の、現在の卵子を先ずは研究材料として差し出せば良いんですよね？」
「！　うん！　そうしてくれると、とてもありがたいよ」
『リン無理はしなくて良いんだ』
救命ポッド内で過ごした時間でニシとは、まるで兄妹のように打ち解けて再

度、声が凛子に聴こえるようになってからは少々、過保護気味だ。ニシの意識は丸い銀光する球体の中に入り空中に、フヨフヨと浮かんでは凛子の側にいる。

「……ちなみになのですが」

「うん」

「それは、どうやって渡せば良いんでしょうか……？」

あの時から随分と回復した凛子は色々と吹っ切れたのか感謝の念が強いのか自分に出来る事はないか随分と積極的に意思を見せた。その結果、一番欲しい現状の願いをカメは話し凛子は承諾する事となったのだ。

清めた身体に薄着をはおり台座の上で眠りについた凛子を眺めるカメは自分の身体に急激に起こった変化に戸惑いの表情を浮かべていた。カメは薄着の前を開いた凛子の白い裸体を見て自分の身体が震え汗が滲み鼓動がおかしくなった為、一度、検査をし興奮状態にあるが身体は非常に良好と出た。

「興奮……僕は興奮しているのか……」

『カメ、自慰の経験は？』
「え……自慰……ああ……知識として……皮を剥く作業はしたけど……あれは自慰なのかな」
『精子は出たのか』
「精子は……自然に出るものだから……」
『自然に出るのか』
「眠りから起きた時は基本……あー……でも皮むきの時に、ちょっと滲んだ事はあるかなあ」
『受精の仕方は卵子との結合か』
「うん。そこは同じだね。記憶によると半年に十日程の妊娠期間があるから完全に受精するまで交代で女性体と行為していたらしい。ただ女性体がクローンになってからは同じく卵子を摂取し培養液内で育て一定の時期が来たら外で成長する為に出るのは多分、僕らと同じかな……一年程は知識を吸収し出てから

は歩行を覚え自動化はされているけれど管理を行い……」
『幼体が管理者となるのは酷ではないか』
「うーん。前は前任者が共にだったけれど改善されてからは、そうでもないよ。計算の元、出るまでに筋肉の作りも強いものになっているから精子だって出てから半年で摂取できるようになるんだよ。成長も昔より早いし」
『成人までの年数は？』
「多分、出てから三年ぐらいかな」
『その個体の平均生命活動の年数は？』
「平均は九十年ぐらいじゃないかな最長で百八十三年」
『最短は？』
「外に出て直ぐ終わるのも数多くいるから……僕らは学んでいるんだ」
そこまで、ニシと会話を進めるとカメは自分の前を寛げて服の中で窮屈そうにしていた性器を徐に取り出した。

「……」

『……』

急に検査室内は静かになり、カメは恐る恐る口を開き呟く。

「……皮の上下はするが、こんな風になったのは初めてだ」

『……ニシには分からない変化だが情報では、そうなった場合、静めるか自慰をして気分を向上させるのが基本のようだ』

「自慰……」

カメは凛子を、じっと見つめると徐に自分の男性器を握りしめた。

「……なんか出来そうな気がする」

『自慰か』

「うん」

カメは清潔を保つ時に知る普段の皮下ろしをして内側の桃色の面を出し皮を動かしながら竿の部分を強めに上下させる。吐息だけ溢し無言で、それを繰り

返していると先っぽから透明な液体が滲み垂れるが気にせず、そのまま一緒に動かしていれば、その液体を含むと滑りが出ると気づき、どんどん出てくるそれを手の平の内側に拾いながら繰り返し繰り返し肉棒を刺激した。

――……錆に油を刺すみたいな……？　何これ……変な感じ……♡

にち、にちにち、ぬち……

検査室内で響く粘ついた液体が摩擦で弾かれ妙に耳奥に響く。

「……っぅ、ぁ……ぁ、あ♡　ううっ♡」

身体に膨れ上がった感覚に一瞬手を止めそうになったが続けたい欲求がカメの中で勝り次の瞬間、白い液体が、どりゅどりゅと肉棒の先っぽで、ゆったりと滲み出る。

「ふー……ふー……♡」

カメの視点は凛子を見つめながら定まらず口からは涎が垂れガクガクと腰が震え白い液体が、ボタボタと床面へ垂れ落ちていった。カメは荒く呼吸をして呆然と垂れ落ちた白い液体を見つめる。少しするとハッとして検査用の筒の中へと肉棒に残っている所から落とし入れ性器部分を拭くと床に垂れた液体も黙々と拭いたのだった。

＊＊＊

「……今日も良いかな？」

最近カメは私に排卵検査を頻繁に頼んでくるようになった。

『そんなに必要なのか？』

「……うん」
燃えていない救命ポッドから持ってきた布でニシの指導の元、予備の服類を作っていた手を止めて二人の会話を聴く。私としては殆どの生活をカメにお世話になっているし長年の悲願という思いに対して熱心になるのは特に問題はない。
「ここまで縫い終わったらで良いですか？」
「もちろん」
「ただ、遅れ気味だった月経が、もう少ししたら来ると思うんですよね。その場合も調べるんですか？」
「……うん。調べたいかな。仕組みの違いとか基準を作りたいし元々、存在した僕らの女性体は半年に一度だったから、その違いや変化も……」
「半年に一度、羨ましいなあ……私も、そうなれば良いのに……」
「……？　どうして羨ましいかな？」

長椅子の隣に座ったカメは不思議そうな表情をして首を傾げた。
「あ……えーっと、その私達……いや、私個人としては、あんまり月経って好きじゃなくて……」
「好きじゃない？　それは、どうして？」
「その月に一度、来た時に身体が重くなったり……うーん、お腹や頭が痛くなったり……でも休めるわけじゃなくて……それを抑える薬もありはするんですけど常に服用は出来ないですし長い間、痛いと憂鬱な気分になって……私は、そこまでじゃないですけど人によっては月経の日以外も体調悪くなりますし……休みたい時に必ず休めるわけでもなく……」
「なるほど確かに言われてみれば本来、準備期間が前段階である筈なのに月で、それを短い期間で繰り返すというのは妊娠過程としては効率が良いけれど負担を考えると、かなり……そうか……リンコ達の星の者は、そうして子孫存続の為に身体を作り替えたのか……うーん。僕らの滅びた基準から考えると効率的

に聞こえるけれど女性体に負担をかける事が良しとはされない筈だから……」
「あ、あの……ただの愚痴と言いますか……気にしないでください……」
「愚痴？　僕らのように培養液内で育つ過程は、そういった負担の面からも考えられていたと思う。普段の生命活動の中で半年の周期に向けて母体は出来上がり受精が必ず成功するとは限らず作り替える際は内側で出来た面が剥がれ落ちて苦痛を与える構造だったと記憶している。そんな時に休まさない？　リンコの星は随分と忙しい……月の周期もそうだけど効率を重視しすぎた結果、必要なものを失うのは僕らの星とは別の愚行なのでは……でも数は僕らより……ニシ、君らの母星の知識文明時間は推定いくつ」
『知識文明とは人が記録を残している辺りからか』
「そうだね過去の分岐の分は切り落として」
『壁画といった記憶も含むなら約六万年前』
「じゃあ今のように、リンコ達の宇宙旅行に出て活動するようになったのは？」

『一般の旅行となると326年、当初は危険視される行為だったが宇宙生命体との交流から今は緩和され1603年程前からは流行りとされ47年前から星内の旅行は衰退し他惑星へ向かう事が支流化したと思われる』

「随分と短いんだね。僕らの星が交流を絶ってから約二千年程だけれど……ああ、でも記憶にある不時着は……君達の計算で言えば278年前か……あれから語源は、そこまで変わっていないけれど少し音が違うものは速さ故かな。うーん。君達の星は今、生殖の過程で衰退等は無い？　僕としては、これから滅びる可能性の懸念を感じるのだけれど……」

『母星の動きは現時点では人の衰退は緩やかな状況とされる。しかし環境が劣悪で他星との貿易で秩序を保っているが、このまま改善されなければ計算上は資源が尽きる前に略奪へ走ると予測される』

「その場合、君らの星の最終資源は人となるのでは？」

『その問題は153年前から指摘されているが改善はされていない』

「仮定の話だけれど、もしリンコとの受精が可能ならば僕らの星は女性体を欲するだろう、その星の環境が補える資源が、どこまで渡せるかは別だが、その交換は可能だろうか」

『人権の問題をクリアするならば資源としては可能と考えられる』

「なるほど。でも僕らの星は、そういった生殖繁栄に向けてだけれど他星は違うだろう？　惑星によっては僕らを狙って家畜奴隷にし食そうとした愚か者達が……」

『現時点での認識している惑星に他星の者を奴隷化や食すという情報はないが過去、侵入した者の中には、そういった者もいたとされている』

「まあ、まだ、そういった分かりやすいのは良いけどね。君らの状況を予測して待っている可能性はあるから……僕らの星は環境を整えているけれど貿易に乗じて不燃材の捨て場にしようと持ち掛ける者はいるだろう？」

『確かに我が星でも歴史として残っている部分では……』

「あわわ……」
歴史の話や現在の問題になり戸惑う。授業だろうか。
「やっぱり、すごく気になるな……うん。月経の時も念入りに調べさせてほしい」
何も言えなくなり、ぼんやりと二人を眺めていれば笑顔でカメに、そう言われた。
「は、はい……」
研究の話題になると普段の三倍ぐらいカメは話す気がする。元々、研究者のクローンという話だから、そういった知識欲求が強いんだろうと感じた。
「あ、あの縫い終わりました」
「うん？　これは下着？」
「えっ、あ、そうですね」
カメが作り終わっていた一つを見て呟き私は頷く。

「そうか。専用のも作らないとだね」
「専用？」
「月経になったら大抵は横になって剥がれ落ちる痛みに耐えるけれど、その時に常々出血するよね？」
「そ、そうですね」
「止血……いや吸水の方か……用意するから、それを」
「あ、それは一応、ポッド内に予備があったので当分は大丈夫かと」
「……？　でも今後の事も考えるなら、お試しを試してくれないかな」
「あ、は、はい！　それは、もちろん！　ありがとうございます！」
「……ふは、僕は、まだ何もしてないのに。リンコって、すぐ御礼を言ってくれるね」
「へ？　その……気持ちが嬉しいので……」
「気持ちが……そう？　なるほど、じゃあ僕も、ありがとうだ、リンコ」

カメが、そう呟いてニコニコしてくる。そう嬉しそうに言われると私の胸の内側が、ぽかぽかと温かくなった気がしたのだった。

漂流宇宙亀情事　後編

私は、私達は相棒を押さえつけなければならない。相棒達は床面に膝を付き頭を付けて各々のアピールポイントを答える事を求められ正解を出せなければ身を撃ち抜かれた。犯罪者達の操作に従った私達は、もう優秀な存在とされる事はないだろう。星に帰れば処分対処となる。崩れる誇り失われる相棒達。相棒だった肉片を片付けながら私達は彼らに快適な生活を与える為、サポートを繰り返す。

私達は自身の意思で動くことは叶わないが思考が衰えた訳では無い。
会話から判断した所、彼らは母星の指名手配されている死刑囚達であり逃げる為に我が社の船を利用したらしい。なんという迷惑行為であり不愉快であり悔しく虚しい。この純粋たる怒りも他からの認識で私達に対しても行なわれるのだ。全てではないにしても数値で、そう出ている。無能のＡＩ。我が社は私達は終わり。処分、処分、処分、処分、処分。
「っち、保存食ばかりで肉がねえじゃねえか！」
「切り離した方から先に食糧だけでも移すべきだったのう……」
「おい誰だよ爆弾騒ぎに乗じて移る提案した奴は！」
「デブリの時に機転きかせて時間稼げばなあ」
「デブリが運良く来るなんて誰も思わねえだろ！」
「お前も浮かれて乗り込んだくせによ！」
「文句ばっか言いやがって……」

彼らは声を荒げるのが好きらしい。大抵、喧嘩ばかりしている。彼らは一部の技術を其々が持ってはいたが協調性は無く、その為、真面な話し合いがされる様子は無く精密な計画性が無い為か時間と共に焦燥が見えだした。逃走の為に事故に見せかけて船を爆発し足取りを無くした、までは良いが彼らが移住する為の惑星は、そう簡単には見つからない。下手に宇宙連盟加入惑星に侵入し所在がバレてしまえば捕まる事は必須だ。

「誰だよ宇宙には好き勝手し放題な惑星がゴロゴロ転がってるって言い出した奴は！」

「おいおい、勝手に酒を減らすなというとるが……甘味も、もう無いじゃないか。あれ程勝手に持って行くなと……」

「女が泣いてうるせえんだよ仕方ねえだろ！」

「全く、お前らの飢えを凌ぐ為に儂が計算して作ってもお前らが、こんなことをすれば……」

「俺は、こんな場所で終わるつもりはねえぞ！」
「へいへい」
「また責任転嫁してら」
「水は循環器で持つが保存食も時間の問題だぞ」
「大雑把に見て一月ぐらいか」
「温室栽培の豆はあるがのう」
「また豆のスープかあ？　肉、肉が食いて～」
「牢獄の飯より今の方がマシだろ我慢しろ」
「んんだよ……こんな所で死ぬのかよ……」
「どうせ死刑囚の身じゃねえか」
「処刑の仕方が変わっただけってか！　がははっ！」
「まあ女抱ける分、ましっちゃましだな！」
「ちげいねえ！」

「うるせー!!」
「お、やるか、やるか」
「オレ葉巻三本」
「じゃあ、こいつにペット缶」
「え、ペット缶なんてあんの」
「臭せえけど牢獄のよりは味わいはあるな」
「やから食糧を勝手になあ……」
殴り合いや賭け事が始まり騒がしい。私達は、それ毎に汚れる船内を清掃していく。そんな時だ、船の通信に救難信号が入ったのは。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊間＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

宇宙船内では弟は厚着をする必要は無い。専用の宇宙服も、どうやら快適のようで爺さんへの、お土産は、どの惑星のを買おうかなんて話しながら歩く。荷物を持ったまま船内名物の軽食やお菓子を買い部屋で落ち着こうかとした時、妙な音が響き身が浮かんだ。慌てて、お互いを抱きしめ合いながら床に着地する。どうやら事故が発生したとの事で私達は放送の指示に従い救命ポッドに乗り込んだのだった。

十人乗りの救命ポッドは最初に私達、兄弟が乗り出入口から遠い一番奥の二人掛けの席に座った。

「へー……一応、ボディタオルがあるんだね……」

ヨシアが興味を示すので見れば各席に未開封のボディタオルが六枚づつ付いていた。幼少の頃に習った緊急時に風呂代わりに身を綺麗に出来る品だ。見た感じ昔、見た物より性能が良さそうだ。他にも何かあるのかと見れば二席づつ簡易の仕切り下ろしがあり小さな仮眠室のようだと思った。

「椅子の下には毛布と二人分の三日分の食料か……姉ちゃん見てみて椅子回すとボクと姉ちゃんの椅子が合わさってベットになる！」
「あはは。ヨシアまさかの救命ポッドが一番のテンション上がりじゃん」
「だって……なんか……秘密基地っぽくて……」
「うん。確かに、そんな感じするね」
「でしょ！」

カチャ……

出入口の方で音がして顔を上げれば同じ学園の知り合いではない女子が二人、中を覗き込んだ。
「どうする……？」
「人数的に、取るなら、ここぐらいじゃない？」

「えー……まあ、しゃあない？」
「んー……むしろさあ……」
何か二人が出入口を開けたまま、こそこそ喋っている。
「ねーねー。あんたらさ二人でしょ」
「え、はい」
垢ぬけている今時の綺麗な二人に話しかけられ少し、どきどきする。
「今からさダーリン達が来て煩くなるけど大丈夫？」
「え」
「なんなら移動してくれても良いけど」
「……えーっと？」
「……嫌な言い方だね。ボクらが先に居るのに移動してほしいなら、そう、お願いすれば良いじゃん」
ヨシアが嫌そうに言えば女子が、ムッとした表情をし、それから呟く。

「あ～あれか噂の皮膚病の……」
「うわ、ほんとだ移るやつ？」
「ちょ、なんですか、その言い方、嫌なら他探せば良いじゃないですか」
「はー？　あーはいはい、ごめんなさいね～」
「たくっ気いつかってあげたのに、やんなっちゃう」
そう言って二人は一番前の席に座り喋り出す。
「残るのかよ……」
ヨシアが嫌そうに呟いた。
何度か他の学生や乗客が乗り込もうとしたが彼女達が先約ありと止めて追い返す。もし、あの時、彼女達の言い分を聞いて私達、姉弟は移動し違う救命ポッドに乗っていた場合、どうなっていただろう。
「おっそーい！」
「悪い悪い」

「んも～沢山、ちゅちゅっしなきゃ許さなーい！」
「え～！　するする♡」
恋人の男子や、その友達が乗り込んでくる。一気に騒がしくなった。女子生徒が二人、男子生徒が四人。間に二名分の空間が開いている。少し遅れて荷物を抱えた男子生徒が一人入ってきた。間の空間に荷物と、男子生徒が座り込む。
「おう、遅かったな」
「うん、ごめん」
「買ってきたか」
「うん。はい」
袋から頼まれていたらしい菓子や飲物を取り出す男子生徒。それを受け取り他のメンバーは蓋を開け乾杯をした。
「はーい、宇宙旅行を祝って～」
「も～警報うるさぁ」

「えーねーお酒なかったの、お酒」
「え、が、学生だし、お酒は駄目だよ……」
「うっぜっ」
軽い調子で男子生徒が叩かれた時、外からの通信が入る。映像で外の女性船員と新しい女子生徒が映った。どうやら彼らと知り合いらしく彼女が最後の一人になるのだと思ったが顔を青くして、どこかへ走って行ってしまい。結局は帰って来る事は無かった。
宇宙に、たゆたう。
救命ポッドで過ごし三日目、椅子下の非常食を開け口にした。元々、持っていた自分達の軽食や菓子類で各々過ごしていたが三日目になり非常食に手を伸ばした。仕切りがあり一番後ろで良かったと思う。弟と互いの身体をボディタオルで拭き合いながら、この終りの見えない状況の事を考える。
「今回も切り取ったので口の中まで拭く？」

「うん。虫歯まで行く余裕があるかは分からないけれど一応ね」
「わかった」
最初は持っていた携帯歯ブラシを使っていたが水を使いすすぐ事が厳しい為、変更した。

ドゴッ。

何かぶつかる音がして、弟と顔を見合わせる。服を着て、そっと耳を済ませれば前側の生徒達が喧嘩をしているようだった。
「お前、勝手に食ってんじゃねえよ！」
「うるさい、うるさい！　ここは僕の席なんだ！　僕の席のは僕の食料だ！」
「はあ？　このデブ！　苛つく……つーか、お前、臭せえんだよ！」
「ぼ、僕らは同じ時間、お風呂に入れていない。僕が臭いなら君らも同じ様に」

「うぜぇ」
　鈍い音。
「うぎょっ」
「うわ、歯飛んだ？　やば～ちょ～つよつよじゃん」
「聴いた？　豚の鳴き声、ウケる」
「だねー♡」
「けっ、どうせなら、ぶーぶー言わすか」
「何回目で鳴くかなってか！」
　鈍い音。
「ひぐっ、や、やめ……っ」
「おらっ」
　私は吐きそうな気持で弟を抱きしめ耳を塞いだ。しかし、ヨシアは目を見開いて、じっと閉じている仕切りを見つめ。

「姉ちゃんと二人だったら良かったのに……」
そう小さく呟いた。

＊＊＊

簡易トイレを使う為に仕切りを上げなければならない時が憂鬱だった。
目の前の席の男子学生は息はしているが目にするのが痛々しい状況で、そんな中、大抵、前側の六人組は淫らに身体を交えている。暇になると出産率が上がると聞いた事があるが確かに現状況、彼らの娯楽は殴るかセックスをするかのようだった。
「ねえ」
「……」

「そろそろ一緒にしようぜ～」
「姉ちゃんに触るな」
「はあーん？　あ、もしかして禁断の関係なわけ？」
「あっ♡　あっ♡　イく♡　イく♡」
「なーこの豚、外に捨てれねえかなあ。マジで邪魔なんだけど」
「はー……マジ救助隊来ねえの？　遅すぎだろ……」
彼らは簡易トイレの掃除をしない為、私は使い終わったボディタオルで掃除をし便器穴に入れる、それは、そのまま宇宙のデブリとなって彷徨う。
「生きてる？　水飲める？」
弟は仕切りを上げた時だけ倒れている男子生徒に水を飲ませたり飴玉を口に入れたりしていた。
「うわ、また勝手に」
「……彼が言う自分の席の分の食料は正しく彼のモノだ。その権利がある」

「は～やだやだイタい者同士仲良しこよしってかあ？」
「じゃあ次は、お前がサンドバッグね」
「弟に手を出したら殺す」
簡易トイレから出た私は笑う男子生徒の目を見つめ言い。彼らは黙る。
「こわ……」
「冗談だろ」
「そう。私も冗談なの。殺すからね絶対に」
「……」
私達は排泄を済ませ仕切りの中に籠る。優しいヨシアは彼を少しでも助けようとしていたが正直、私は弟以外は、どうでも良い。彼が死んだ時、死体の処理に困る。今は、そう思っているだけだ。

＊＊＊

エンジンが止まり温度調整は出来なくなった。まだ、サポートＡＩの判断で空気循環はされているが食糧は、それぞれ飴玉やガムぐらいになり水分も僅かで弟と私は、お互いの尿を飲むべきか話し合う。

「どう思う……？」

「普段の水分量の際の出たてなら飲むのも、そこまで苦ではないと思うけど限界までボクらは摂取を我慢した上で排泄しているから……不純物の密度が上がって……その……とてもキツいと思う……」

「そっかあ……ヨシアのなら飲めると思ったけど無理かあ……」

ヨシアが目を見開き驚きの声を上げた。

「……え、ボ、ボクの飲むの？」

そう言われハッとして私は頬が染まる。

「え……？　あ、じ、自分のか、そ、そっか、そうだよね……」
「……ボクも、姉ちゃん……カシア姉ちゃんのなら飲めると思う……」
「えっ、あ……うん……えっと……」
お互い見つめ合う。ヨシアが私の手を、ゆっくりと指を絡めて握った。
「……」
「……」
暫くして口を開き呟く。
「……そ、その、た、試す？」
「……うん」
私の言葉にヨシアは頬を染めて、コクリと頷いた。
「……ん、ヨシアが先なの？」
「うん……ボクが先にカシア姉ちゃんのを飲んでから判断する」
「……そ、そっか、んぅ……で、出ると思ったけど……緊張して出ないや……」

「……まって、舐めてみるね」
「えっ、そ、それは……ちょ、駄目だって……っ、ん♡」
「ボディタオルで何時も綺麗にしてるし大丈夫だよ……うん……美味しい……」
「へぁ♡　なに言って……♡　ひ♡」
「……はぁ♡　姉ちゃん綺麗……♡」
「き、綺麗じゃ、なぅ♡　や……そんな舐めちゃ……♡」
頭が混乱する。生き残る為の行動の筈なのに、まるで性的な行為をしているみたいだ。

――……そんな……♡　気持ちい……気持ちい……♡

妙に胸が高鳴る。もしかして間違ってしまったのだろうか。汗が滲み声が上がる。周りは寝ている時間帯だが、これ以上声が出ればバレてしまうかも、し

れない。

――……どうしよ……私……あ……♡　弟に舐められて感じてるの……♡

★★★続きは本編で！　★★★

※R18G+【漂流宇宙亀情事】サンプル

発行日　2022 年 4 月 30 日

著者　意馬心猿
https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。